

オーディオ実験室収載

EQ カーブ対応トーンコントロールの調整(5)(HP 収載)

－Leak Point1 のトーンコントロールの調整(2)－

1. 始めに

前報(4)に引き続き、Garrd401 の再生でトーンコントロールの調整を検討します。

2. トーンコントロールの調整方法

配線は以下のように Garrd401 の再生の Leak Point 1 を、フォノステージを有するプリアンプとして機能させ、トーンコントロール機能を活用します。

Garrd401→STAGE1030→Leak Point 1(フォノ入力)→TruPhase

今回は前報(1)の Table B および前報(2)と前報(3)の結果を受けて Leak Point1 のトーンコントロールを調整します。

使用するアナログ盤は、次のものです。レンジが広く倍音も豊かなピアノ曲と倍音が豊かなヴァイオリンとコントラバスのピチカートが入った曲を選んでみました。

Garrd401 には Magic Mat II を敷いておきます。

LONDON 360R 56009

モーツアルト ディベルティメント 17 番

ウイリー・ボスコフスキー指揮ウィーンモーツアルト合奏団

ドイツグラモフォン MG2366

ベートーヴェン ピアノソナタ 30 番

ウイルヘルム・ケンプ (ピアノ)

TRIO (ACharlin) PA1117

ベートーヴェン ピアノソナタ 30 番

エリック・ハイドシエック(ピアノ)

Columbia M2S728

ショパン バラード G minor

ウラジミール・ホロヴィッツ (ピアノ)

3. トーンコントロールの調整結果

それぞれ、前報(1)の Table B および前報(2)と前報(3)のトーンコントロールの結果を受けての条件とします。

ボスコフスキー盤は、DECCA、R、第4時定数 High ですが、イコライザーカーブと位相と第4時定数は調整できませんので、RIAA の再生からトーンコントロールを調整します。前報(2)の結果からトーンコントロール調整を Bass は 3 時、Treble

を3時とすることで、全体にぼやけ気味であったことから、高弦がクリアーになり、コントラバスのピチカートが明瞭になります。Treble に関しては4時くらいまで上げると高弦の切れがよくなります。しかしながら逆相の本盤の位相反転ができませんので定位の曖昧さは残ります。

ケンプ盤は、TELDEC、R、第4時定数 Mid ですが、イコライザーカーブと位相と第4時定数は調整できませんので、RIAAの再生からトーンコントロールを調整します。前報(2)の結果から Treble を3時とすることで、キャンつきが後退し、高音の打鍵の響きがクリアーになり、低音まで力強さが増します。しかしながら逆相の本盤の位相反転ができませんので定位の曖昧さは残ります。

ハイドシエック盤は、EMI、R、第4時定数 Low ですが、イコライザーカーブと位相と第4時定数は調整できませんので、RIAAの再生からトーンコントロールを調整します。前報(3)の結果からトーンコントロール調整を Bass は2時、Treble を3時としたところ、全体にぼやけ気味であったところから、高音から低音までバランスよくクリアーになり、打鍵の力強さも見えてきました。しかしながら逆相の本盤の位相反転ができませんので定位の曖昧さは残ります。

ホロヴィッツ盤は、Columbia、R、第4時定数 Low ですが、イコライザーカーブと位相と第4時定数は調整できませんので、RIAAの再生からトーンコントロールを調整します。前報(3)の結果からトーンコントロール調整を Bass は3時、Treble を3時としたところ、ぼやけ気味の音で強打になるとやかましさがあつたところから、高音から低音まで打鍵のクリアーさが戻り、強打でも破綻がなくなりました。しかしながら逆相の本盤の位相反転ができませんので定位の曖昧さは残ります。

以上から、位相反転ができないことは仕方ありませんが、真空管プリでありながら、適度な切れ味や解像度が得られることから、このシステムでトーンコントロールを活用することが有益と考えられます。

4. まとめ

前報(4)と同様、フォノステージが ZANDEN Model 120 であった前報(2)と(3)のトーンコントロールの調整が、フォノステージを Leak Point 1 にした場合でも概ね再現されました。前報(4)と本報の結果から、前報(1)の方針と前報(2)と前報(3)の結果を参考にして、Leak Point 1 のトーンコントロールを積極的に活用することが重要であることが分りました。

以上